

第二十七章 逆転阻止

自由民主党の総裁を目指すものにとつて、幹事長はきわめて重要なステップである。すべての幹事長が総裁になれるわけではないが、結党当初の鳩山、石橋を除いて、岸、池田、佐藤、田中、三木、福田と、歴代の総裁は幹事長経験者であった。

大平は、それまでの二十五年の政治経歴の中で、官房長官二年、外相四年（通算）、通産相一年、蔵相二年半と政府においては多様な経験を重ねながら、党三役の方は、池田内閣時代に幹事長就任の機会を派閥の事情で見送つて以後、政調会長を一年つとめただけであつた。

党務経験の乏しい大平を心配した親しい記者が、「党幹事長のような荒っぽいことをやって大丈夫ですか……」と質すと、大平はしばらく沈黙した後、「まあ、ジャングルの中に入って行くようなものだ」と答えた。

党則によれば、「幹事長は、総裁を補佐し、党務を執行する」とだけしか規定されていないが、政権政党である自民党の場合、総裁は首相となつて行政府の仕事に専念し、党務を見るゆとりはほとんどないので、実際には幹事長が党運営を行うこととなる。まして、福田、大平間の話合いによつて、「政府は福田、党は大平」と仕事の分担をはっきりしたので、党運営の責任はすべて大平幹事長の肩にかかることとなつた。

時々刻々と変化しながら渦巻き、衝突する国民の多様なニーズや願いを束ね、整理・調整して施策に反映して行くのが政党の大きな役割の一つであるが、その主たる調整役が党幹事長である。その自民党幹事長のところへは、全国から、ま

た各階層からさまざまな問題が持ち込まれてくる。

大平は幹事長就任後間もなく、「この扉は開けておくことにしよう」と幹事長室のドアを開放するように指示した。ジャングルには何が棲んでいるかわからないが、その主となった以上、すべてのジャングル住民に門戸を開き、生の声が聞けるようにしておこう。それが大平幹事長がまずはじめに示した姿勢であった。

ところで、昭和五十一年十二月二十四日、首相に指名された福田は、その夜のうちに新三役（大平幹事長、江崎真澄総務会長、河本敏夫政調会長）、安井参議院議員会長、園田直新官房長官を参謀に組閣を行い、宮中の認証式も済ませた。閣僚に鈴木善幸農林、田中龍夫通産、石田博英労働等のベテランの他、鳩山威一郎外務、渡辺美智雄厚生、海部俊樹文部、石原慎太郎環境等、異色の新人が抜擢され、また、衆議院議長には保利茂が選任された。

“大福体制”と呼ばれたこの新体制は、発足当初から重い荷を背負っていた。前年いっぱい続いた党内抗争の傷跡は生々しく、ロッキード事件は未解決のままであり、党体質に対する批判とそれに起因する政治不信は根強く残っていた。党改革には手をつけられておらず、民意を問うた総選挙は結党以来の不成績に終わり、衆参両院を通じての与野党の伯仲状態が出現していた。

このような背景の下で、大福体制の政治的課題は次の三点に絞られた。

- 第一は、大福の合意した 出直しの党改革 を実行し、責任政党としての実を挙げ、政治への信頼を回復すること。
- 第二は、半年後に迫った参議院選挙で保革逆転を阻止し、政局の混乱を防ぐこと。
- 第三は、伯仲状態の下で国会を正常に機能させ、国民から負託された責任を果たすこと。

一口に“大福体制”と言っても、これまでのように、反主流派を排除するような党運営ができる状態ではなかった。衆議院でも参議院でも、ほんの数人の与党議員が叛旗をひるがえせば、与野党は逆転し、国会運営は行き詰まってしまうことは明白であった。政局安定のためには挙党体制の実現が不可欠であり、三木派の有力者河本敏夫が党三役の一角をなす

政調会長に据えられたのも、そのような配慮によるものであった。

ところで、第一の課題の党改革問題については、福田総裁自らが実施本部長となり、第二の課題の参議院選挙については、大平幹事長が選挙対策本部長に就いた。第三の課題の伯仲国会の運営には保利衆議院議長があたり、これを補佐する議院運営委員会の長に、保利と密接な金丸信（田中派）が選ばれた。また、国会の委員会の要である予算委員会の委員長には坪川信三（福田派）、国対委員長にはニューリーダーの一人と目された安倍晋太郎（福田派）が選任され、国会、党、政府が一体となって機能する布陣が敷かれた。

大平幹事長は、参議院選挙に臨む人的配置としては、選挙情勢に詳しい竹下登（田中派）を党組織委員長とし、広報委員長には経営者としての経験豊かな小坂徳三郎（無派閥）、国民運動本部長には実行力に富む中川一郎（無派閥）、選対事務局長である総務局長には奥野誠亮（無派閥）を起用するなど、全党的に定評ある人材を当てた。

この時の人事について、のちに竹下は、「大平幹事長は、われわれ若いものを信頼して全面的にまかせてくれた。だから、われわれも伸び伸びとやれました。考えてみれば、われわれは、大平先生の掌の上で上手に使われたのだと思います」と語っている。

大福体制発足後十日もたたないうちに、年が改まり、昭和五十二年の元旦を迎えたが、その日大平にはうれい出来事が生じた。恒例の宮中参賀を済ませて宮中のトイレに入ったところ、偶然、そこで、尿道結石の石が出、しばらく悩まされていた痛みと熱から解放されたのである。この時、横に並んでいたのは江崎総務会長だった。

「新宮殿のお手洗いで、大平さんと並んで用を足していた。『ああよかった』と大平さんが歓声をあげた。びっくりして横を向くと、よかった。『いま石が出たよ。石が……』と、ほっとした様子だった。』（『回想録』追想編）

この喜びは、党本部主催の名刺交換会にも持ち込まれた。よほどうれしかったのであろう、大平幹事長は党本部の幹事長室に入るなり、斎藤邦吉副幹事長や奥島貞雄幹事長室長など誰彼なしに大声で話してきかせた。元旦の宮中の出来事ということもあり、何はともあれ『こいつは春から縁起がいい』と、幹事長室には久しぶりに明るい笑いが巻き起こった。

こうしてあけた昭和五十二年の新春も、幹事長には、ほっとしている暇はなかった。松の内から五十二年度予算の編成や一月の定期党大会の準備に取りかからなければならぬのである。

第三十二回定期党大会は、一月二十六日、文京公会堂で開催されることになっており、この大会では、大福体制が、党改革やこれからの政治運営にいかなる姿勢を打ち出すが注目された。ロッキード事件と選挙の敗北という二重の衝撃を受けた後の党大会であり、例年のようなお祭り気分のシャンシャン大会は期待すべくもなかった。

大平幹事長の党情報告は、全党員に告げ、全国民に語りかける第一声として自ら筆をとったもので、厳しい調子で貫かれていた。すでに触れたように、報告は過去一年間の党内抗争を回顧し、党の現状を分析した上で、総選挙の結果を次のように総括した。

「結党以来、わが党に対する国民の支持率は、漸次後退傾向をたどり、ついに昨年末の総選挙における敗北という事態に立ち至ったのであります。このことは、国民が自由社会を守るといつわが党の基本的立場に対し拒否反応を示したものでなく、わが党の政治姿勢と体質、さらにはその活動に国民が大きい不満を感じていることを示したものと信じます。このことを他の面からみれば、支持政党をもたざる国民層が、いつの間にか全有権者の半数近くにもふくれ上がってきている事実によっても裏書きされていると思います。これは大多数の国民の期待とニーズに、第一党であるわが党が適切に対応できなかった証左であると思います。」

この状況認識は、国民の良識への信頼と自民党の「対応力の不足」にたいする厳しい反省に立脚したものであり、大平が六年前宏池会会長として初めて世に問った「日本の新世紀の開幕」の延長上にあるものであった。

このような状況認識から、報告は「新しい状況に即した組織と活力をもつ党の再生」を緊急課題として掲げ、その重点を、党の組織と支持層の拡大、党財政の確立、広報活動の充実向上、派閥問題を含む党運営の改善、総裁公選規程その他党則の改正、の五点にまとめていた。(『回想録』資料編参照)

また、この大会では四月中に臨時党大会を開き、それまでに当面の急務である党改革の諸問題について一応の結論を出す、という方針が決められた。参議院選挙の火蓋が切られる六月前に、最低限度なすべきことをすませ、党の再出発を實現した上で選挙を戦おうというのが党幹部の決意であった。

ちょうどこの頃、大平幹事長は、就任後一カ月の感想を次のように語っている。

「銀座四丁目の角にじっと坐っているようなもので、いろいろな人が通り、いろいろな人が話しかけてくる。それを右から左から、あらゆるものを見ながら仕分けていくのだ。役人のように、決まったルールがあるのではなく、大衆の何が起るかわからないところに対応していく、それが幹事長の仕事だな。」

自民党結成以来はじめての衆参両院伯仲国会は、一月二十一日に再開された。通常国会の焦点は、例年、衆議院の予算委員会にあるが、今回は、予算委員会において与野党の委員数が同数となってしまうていた。したがって、委員長を与党から出すと、与野党の数は逆転し、野党が全員反対にまわれれば、与党の敗北は不可避であった。予算委員会で政府原案が否決されても、本会議でこれを逆転可決すれば原案は通るのだが、委員会で否決されたものをひっくり返すのは容易ではなく、また委員会中心という国会運営の原則からみても、それをしばしば行うのは、決して望ましいことではない。与党が本会議での逆転可決を強行すれば、全野党の組織的な抵抗にあつて、他の重要案件がほとんど通らなくなることも考えられた。

さらに野党側が政府の予算原案の可否を問う前に、組替え動議を提出し、それを可決してしまうことも可能であった。予算が修正で済む場合は、政府がこれを了承すれば問題がない。しかし、組替え動議の成立は、実質的には国会による政府原案の否認に等しい。この場合、政府が国会の意思に従って原案を組み替えるとすれば、予算書を再度提出し直さなければならず、それには非常な手間と日数を要し、予算の成立を遅らせ、国民経済、国民生活に大きな迷惑を及ぼす。

このようなきわどい状況を背景に、政府、与党にどのような譲歩を求めるかが、再開国会における野党のはじめからの狙いであった。したがって、表舞台の予算委員会での議事の進め方は、与党を政治折衝の裏舞台に引き込むための駆引き

に重点が置かれていたと言える。政府、与党としても、初めからそのことのあるのは覚悟していた。その全責任を負う大平執行部は極度に神経を張りつめ、薄氷を踏む思いであった。

予算委員会をめぐる政治折衝の問題は、大きく分けて二つであった。第一は、社会、公明、民社、共産、新自由クラブの五党が、それぞれの性格や立場の相違を超えて統一予算修正要求をまとめるかどうかであり、第二のレベルは、野党五党間の統一戦線が形成された場合、自民党がどこまでその修正要求を呑むかということであった。この二つの問題点をめぐり、与野党間および野党相互間で活発な舞台裏の接触が行われ、その駆引きが自然成立のタイムリミットである三月下旬を目前に次第に緊迫して行った。はじめはバラバラだった野党も、自民党から分断されるのを恐れて歩み寄りを見せ、その修正要求は、結局、一兆円減税と社会保障関係費の増額という点でまとまった。

三月七日、与野党国会対策委員長会談で、五野党は「予算修正に必ずやる意思があるのかないのか、まずそれをはっきりせよ」と要求してきた。これに対して自民党側は「修正を要求するなら、その内容や目的を示せ」と野党側の弱点を衝いて切り返した。翌八日、自民党は総務会を開いて「予算および予算関係法案をできるだけ早く上げるように努力せよ」との方針を決め、具体的な処理が三役に一任された。この日、安倍国対委員長は与野党国対委員長会談で、「九日に与野党幹事長書記(局)長会談を開く」よう申し入れた。

福田首相、大平幹事長らは、この時までに修正に必ずやる手当てとして、三千五百億円までの財源を用意していたが、野党の言う一兆円減税、相当規模の社会保障費という要求とはかけ離れていた。非公式な接触を通じて野党首脳から、五千億円の大台を越せばまとめるといった情報は入っていたが、それでもまだ与野党間の開きは大きかった。

予算折衝を一任された党三役は、院内三階の自民党総裁室に陣取り、この日(九日)の会談に臨んだ。

「さて、いよいよですが、何か心得ておくべきことはありませんか……」と政治折衝に臨む直前、大平幹事長が執行部の顔を見回した。

「幹事長、十分に承知のこととは思いますが、こんな場合、回答を小出しにはいけなと思います。今日中に決着

をつけるつもりでやられるようお願いします」と、河本政調会長が珍しく積極的に意見を述べた。うなずきながら聞いていた大平幹事長は、他に発言のないのを見ますと、「それでは行ってきましょう。済んだらまたご相談しましょう……」とふだんと全く同じゆっくりした態度で立ちあがった。成算があるのかないのか、茶飲み話に行くような表情であった。見送る党幹部たちの顔の方に、「大丈夫かな」という不安気な様子が見えた。

石橋政嗣社会党書記長、矢野銜也公明党書記長、塚本三郎民社党書記長、不破哲三共産党書記局長、西岡武夫新自由クラブ幹事長を相手とする会談は、九日午前十一時から断続的に四回にわたってつづけられた。大平幹事長の提案を野党側が協議する形で「休憩」「再開」を繰り返したが、五時過ぎの第三回会談で大平幹事長は一気に勝負に出た。

「ぼくがこれから出す提案は、文字どおり掛け値なしの数字だ。これ以上言われても一文も出せないから、承知して聞いてくれ。大平はこう前置きして、よどみなく具体的な提案の説明を始めた。その態度や口調には、自分としては最大限の誠意を示したのだ。いやならいやで已むをえない」という肝をくくった感じがはつきりと示されていた。

「イエスかノーかだけを答えてくれ」と迫る大平に、各党の代表は、十五分ほど休憩した後、八時から始まった第四回会談で、「不満ではあるが、已むをえない」と、ついに大平案を呑んだ。

政治折衝の成行きを心配して待機していた党幹部の間に喜色が甦り、「ご苦労さまでした」と凱旋將軍をねぎらうような声はがずんだ。どうこじれるか、何日かかるかわからなかった政治折衝が一日で片つき、しかも修正は、政府、自民党が予定していた枠内で済んだ。こうしてこの国会最大の山は越えたのである。福田首相はじめ党幹部に報告する大平の顔には、ときどき笑いがあった。一連の会談を裏から見れば、実は攻められているのは自民党ではなく、五野党の方であったのかもしれない。後に河本が、「大平幹事長のあの日の決断が、すべてを決定したのです」と語っているように、それ以後の伯仲国会が「話し合い」で機能することがこの日の会談によって方向づけられたのである。

翌朝の新聞には「珍しい写真」と説明つきで、大平と共産党の不破書記局長がにこやかに握手し、これを他の四野党の幹事長、書記長が見守っている写真が載せられた。

矢野公明党書記長はのちに、「大平さんは、日本国あつての自民党という考え方であり、視野の広い柔軟な思考の政治家だつた。伯仲状態という現実を十分に踏まえ、必要ならば野党の言うことも聞くという姿勢を持っていた。一方、ガンコなところもあつた。呑めない問題を要求すると「そんなことはできません」とびしつと拒否した。いずれにしても、あの態度と視野の広さが、伯仲国会をスムーズに機能させた」と語っている。

この第八十通常国会では、政府提出案件七十六件のうち六十五件が成立した。「打率」は八十五・五%に達し、自民党が安定過半数の議席を占めていた時代の八十%を超える成果を挙げた。

この成果をわが民主政治の成熟として、与野党の良識を評価する人もあつたし、大平幹事長の人柄や力量がもたらしたものだと言つものもあつた。だが、政治の中心が政府から国会へ大きく移行したことは確かであつた。

大平はのちにこう述べている。

「各党は、それぞれ民意を束ね、これを代表している。民主主義政治は、できるだけ多くの国民の民意を反映させることが望ましい。わが国の民主主義で満場一致をもつてめでたし、めでたしとするのは、そのためであつて、各党が話し合い、努力するプロセスが大切なのである。」(昭和五十三年一月「党情報告」)そして、この考え方はやがて「パーシャル(部分)連合論」と呼ばれる戦略へと発展して行くことになる。

予算案成立の見通しがつくと、全党の関心は三月月後に迫つた第十一回参議院選挙に集まつた。この時点で自民党の議席数は百二十七名、過半数をわずか一議席上回つていたが、改選議員は六十五名で、少なくともこの現状を守らなければ与野党勢力比の逆転は阻止できない。最近の実績から見てもそれは容易でない上に、過去一年の党内抗争や未解明のままのロッキード事件に対する不信がくすぶつていた。その上、党の選挙準備はいつになく出おかれていた。衆議院の選挙と異なつて、参議院選挙はその実施時期が決まつており、一年近く前には候補者の大部分が内定して、選挙準備をしているのが普通である。ところが自民党は、重なる紛糾で人材の発掘、候補者調整が遅れ、一月末の時点では、全国区二十三名、

地方区四十二名、合計六十五名が決まっているだけであつた。六十五名以上の当選を期すためには、あと全国区で四、五名、地方区で十四、五名の公認候補が必要だつたのである。

大平幹事長は、三月から四月にかけて、とくに人材難が著しい全国区候補を求めているいろいろな筋を打診したが、自民党政治家が悪玉視されていた状況にあつては、大平好みの人材は容易に説得に応じるはずがなく、候補者探しに大平幹事長四苦八苦”などと新聞でひやかされた。

こういう状況を受けて、マスコミはこの頃参議院選挙での与野党逆転は必至と見、さかんに「連合時代」の到来を論じていた。野党各党からは連合政権の構想が華々しく打ち上げられ、さらに新自由クラブ・ブームを支えた無党派派層の結集をはかつて、社会市民連合、革新自由連合等の新会派が誕生し、参議院選挙はかつてないカラフルな様相を呈していた。

大平幹事長は、一月の党大会で、前回の参議院選挙で野党に取られた一人区八つを奪回し、「一人区全部を独占する」決意を表明していたが、その胸には、誰にも明かさぬ一つの目算が育っていた。全国区で最低十八名、地方区は各都道府県で一人ずつの割で確保すれば四十七名となり、合計六十五名で逆転阻止できる勘定になる”。だが、どうしたらそれができるのか。まず地方区では、二人区、三人区、四人区で一人取ることには難事ではない。また幾つかの複数定員区では、うまく票割りをして競り合わせれば二人取ることでもできよう。しかし、二十六ある一人区では、野党共闘のいかにで八議席の奪還が困難になるだけでなく、それ以上に失つ危険もあつた。

全国区は地方区よりもさらに作戦が問題となる。この選挙の当選ラインは七十万票というのが大方の予想であつた。当選ラインが高くなれば、浮動票の見込まれない候補は不利になり、低くなれば堅い組織票を持つ候補が有利になる。しかも当選ラインは、党のその時点での人気に影響されるだけでなく、投票率によって大きく左右される。したがって、党の集票能力を見積もり、何人の候補を立て、どのように票割りするかは、きわめて複雑、困難な課題であつた。昭和四十九年の第十回選挙では、自民党は全国区できわめて効率の悪い選挙をしてしまった。特定の候補が大量得票し、ボーダーラインの候補がバタバタと落ちてしまったのである。大平はこの轍を踏まぬように周到な計画を立て、竹下、奥野、小坂、

中川らを活用して、選挙戦を開始した。こうした動きを身近で見ていた砂田重民副幹事長は、「大平幹事長の采配は、目立たないが、実にきめ細かく手を打っている。どこで情報を仕入れるのか、実によく情勢を知っており、打つ手はびっしりである。しかも、人を扱うのがうまく、全関係者を一本にまとめるように持っていく」と感じたという。

選挙が近づくとともに、大平幹事長の日程は殺人的になりはじめた。面会の時間を取るのに「ケンカ腰」の騒ぎが持ちあがるのが普通となり、ときには四組、五組の来客が待つことにもなった。大平は来客の間を駆け回ったり、立ち話で済ませたりしていたが、それを楽しんでる風でもあった。四月十三日には英国保守党党首のサッチャー女史を迎え、月末にはアメリカの人気歌手パット・ブーンと会い、またしばしば海外のジャーナリストからの取材をうけるなど、外国の要人や知名人の来訪も多かった。

このような状況下で自民党の臨時党大会は「自民党改革・躍進総決起大会」という名のもとに、四月二十五日、文京公会堂で開かれた。それは文字どおり党改革と参議院選挙の必勝を期した大会であり、これを跳躍台として一挙に終盤戦に突入しようというものであった。大会では、一月に大平が幹事長として提出した五項目の党改革が論議されたが、その結果、全党員党友参加の総裁公選予備選挙の導入が決定され、福田総裁の就任満二年に当る昭和五十三年十二月一日に実施されることになった。また、総裁公選への全党員党友参加に伴い、一百万党員の獲得、党員資格の明確化、党友による『自由国民会議』の結成も決定された。派閥の弊害の除去については、福田総裁のたつての要望で、臨時党大会までに各派閥を解消することとした。

大平幹事長は、「三人集まれば二つのグループができるほど、人間は本来派閥的動物であり、あらゆる人間集団には派閥が存在するものだ」という考えの持主であった。「趣味や好み、人間関係などでグループができるのは自然である。政治の集団でも同じである。派閥は構成員の相互の協力、親睦、教育や情報の伝達、人材の発掘など、党だけではできない問題について、それなりの役割を果たしており、一概に悪とのみ決めつけるのは酷である」と大平はつねづね言っていた。現実から目をそむけ、できもしないことをさもやるように言うことを大平は好まなかった。しかし、党内外において派閥

解消論が力を得ているという現状や大福提携という現実を無視することもできなかった。

大平は、一月の党大会での党情報報告で、「いわゆる派閥は、情報や教育のシステムとして、あるいは党の独裁化を阻む力として機能した面を否定するものではありませんが、派閥のもつ独善性と排他性は、党の主体性を犯しかねないので、この際、既存の派閥はこれを解消することとし」と述べ、また臨時党大会でも、「従来の議員集団（派閥）が果たしてきた機能、たとえば新人の発掘、党員の教育と情報交換等は何らかの形で党自体によって継続されなければなりません。派閥解消後のわが党について、その活力の衰退が云々されるようなことのないよう配慮しなければなりません」と指摘した。これらの発言には、派閥解消に対する大平の複雑な心境がよく示されている。

五月に入っても国会はなお開会されていたが、与野党逆転のかかった参議院選挙を前にして、各党とも地道な国会審議どころではなかった。大平も休会日には地方区の候補者の決起集会に、あるいは県連の政経文化パーティーにと東奔西走していた。すなわち、五月十五日には秋田、宮城、十六日には兵庫、十八日には新潟、十九日には埼玉、二十一日には香川、二十二日には広島、その間にも東京では国会審議や選挙情勢の協議、各種団体との会談、全国区候補の応援と、日程はびっしりだった。投票日が近づくとつれてそれはさらに過密となり、五月二十九日は岡山、三十日鳥取、三十一日宮城、六月一日新潟、三日東京、四日青森、五日福井と一日も休む暇のない状態になった。

六月を迎える時点では、全国区、地方区の全候補者、地方組織、党の体制などが整った。選挙情勢の変化に一喜一憂するスタッフに対して、大平幹事長は「選挙に奇手妙案はない。考えられることをやるだけやって、あとは有権者の回答を静かに受けとるしかないではないか」と言ったが、大平自身としては細心の注意をもって考えるだけ考え、納得のいく準備も進め、必要とされる手は打ってきたという自信にあふれているようであった。

世論調査では、福田内閣の支持率は低迷しているのに、自民党の支持率は十年ぶりで僅かながら上向きに転じ、調査ごとにながら上がってきていた。

大平幹事長は「一対一の対決で負けるはずはない。全関係者をそこに追い込んでいけば何とかなるだろう」と大まかなことを口にしてはいたが、腹の中では、統計数字や地元の情勢分析や手こたえなどをもとに、自分なりの目算は立てていた。こうして六月一日、日本記者クラブから講演を頼まれた大平は、質疑に答える形で「地方区で四十五議席は確保できると思う。全国区もうまく票をわけて、改選議席の六十五は確保したいと考えており、過半数を割ることは考えていない……」と目算を語ったが、報道関係者は、これを「自民党幹事長の希望的発言」と見て、ニユース的価値をほとんど認めなかった。記者たちが主として注目したのは、大平が、今後の政治運営について「そのときどきの案件に応じて自民党を軸としたパーシャルな連合が組まれるのが現実的である」という考え方を示したときであり、それは、連合の時代への自民党の対応”として各紙の見出しとなった。与野党逆転 連合時代の到来というのが、当時のマスコミの支配的な観測だったのである。

このとき、幹事長の手もとは、あらゆる世論調査の追跡調査の結果、不利と言われた選挙区でも自民党は急速に浮上し、この勢いを保持すれば自民党候補が対立候補を追いぬく公算が見えはじめていた。だが、問題は一カ月余りしかない残りの期間で、それが現実化するかどうかであった。

六月十七日、参議院選挙の戦いの火蓋がいよいよ正式に切られた。大平幹事長は党本部での第一声のあと、全国区の候補者の激励のため、各選挙事務所の出陣式に顔を出して回った。選挙戦のスタートが切られれば、スケジュールに乗って走り回り、作られた遊説日程をしゃにむにこなすだけである。重点の東北には六月の末に入った。青森、秋田、山形、宮城四県を三泊四日で回る強行軍であった。山形県の米沢で地元幹部との会合のため上山温泉に向かったとき、座敷で餅をつき、その場でカラミ餅にして食べたが、「大平先生、一白いかがですか」と勧められると気軽に立ちあがって餅つきをはじめた。昔とった杵柄というが、それが実に型にはまっていた。秘書が「自分は七つ食べた」というと、餅が好物の幹事長は「ボクはもつと食べたよ」と自慢して、子どものような顔で笑ってみせた。

七月初めになると、大平幹事長対談や寸言が各新聞の紙面を飾った。『朝日新聞』七月四日付では、「自民党結党以来の危機ですが、今はどんな心境ですか」と聞かれ、大平は「まあ、私はイカダに乗っているような気持です。流れが気に入らんといつても、いままらどうしようもない。流れのままに流れるよりしようがない。流れをみつめながら、岩壁にぶつからないように、激流にのみ込まれないように気をつけながら……」と語っている。

「最近の大平さんは何を考えているのか、という声を自民党内できくが」という質問には、「きのうもきょうも同じペースで考え、行動してきた。別に変ったこともない。手軽に胸がスツとするようなことをいうのは私の性に合わない。それはともかく、私は日本人は意外に賢明で、平衡感覚を持っていると思う。内政、外交とも不協和音はいろいろ出るが、重心が大きく狂うことはない。だから、あわてて危機感をがなり立てる必要はないと思っっているわけだ」と、自信をのぞかせた。

大平が幹事長就任以来考えつづけていたのは、衆議院選挙では自民党が五十%以上当選するのに、なぜ参議院選挙の地方区では負けるのかということであった。前回の参議院選挙で八つも一人区で負けたのはなぜか。野党共闘による票の上積みもあつたらう、公明党票の大部分が社会党に流れたこともわかる。だが、それでも計算が合わない。どうして自民党以上に低落傾向の激しい社会党に多くの票が流れこむのか。その理由をつきとめ、これに対処する方策を立てられれば逆転は阻止できるはずである。問題のすべての鍵は浮動票対策であつた。

この「支持政党なし層」は、「わからない」という回答を含めると最低でも全有権者の二十四、五%、多い場合には四十%にも達することもあり、その比率がジリジリと上がっているのが、ここ数年の著しい傾向であつた。この時点の有権者総数は七千八百万人であるから、おおよそで二千万人から三千万人の有権者が支持を固定しておらず、投票日直前に判断を下すことになるのである。その大部分が野党に流れたら自民党に勝ち目はない。大平は、この浮動票を反自民にまわさず、できたらず自民党に誘導することに心を砕いた。

全県一区の選挙では、衆議院選挙などで日頃競り合っている自民党の陣営同士が仲間割れし、一部が棄権するか野党に

流れることもこれまでままたった。この仲間割れを防ぎ、各陣営を一本にまとめなければならぬ。そのためには与野党逆転の危機感に訴えることが一番よい。次に、浮動層を反自民にしないためには、なまじな政策論争は有利ではない。自民党が新しい政策を提示すれば、野党は実行の裏づけもないまま、より甘い数字や耳ざわりのよい言葉を出してくるのがおちである。PR効果にしても、マスコミは選挙になれば各党を平等に扱うので、与野党の比率は一对六ないし一对七となり、過半数を目指す政党にとって少しも有利にはならない。

大平幹事長の肚は決まった。争点なき選挙大いに結構、最後までとりたてて新政策を出さず、野党と対決せず、自民党内部を危機感一本で追い込んで行くというのである。しかし、これは危ない賭けでもあった。

投票日三、四日前になって社会党の多賀谷真稔政審会長や民社党の塚本三郎書記長らが「自民党はずるい。政策を何も打ち出さない」と不満の発言をし、小さな記事になったが、もうあとの祭りであった。全陣営を引き締め、一丸となって最後の瞬間まで戦いぬき、勝利を確保せよ、という突撃指令も打ち終わった。このまま無事で三日間行ってくれという心境で大平幹事長は投票日を待った。

大平幹事長の最終日の遊説は山梨と東京であった。その二日前の七月七日、長い旅から本部に戻った幹事長は記者たちに、「いつもの選挙と変わったことがありますか」と逆質問し、そのご機嫌ぶりをいぶかしがられた。「霧は晴れたか」と聞かれると、曇り空を見上げ、「暗雲が出てくることはもうない。十日は快晴だとよいな」と七夕の空を祈るように見つけた。

投票日の十日、最後の気がかりであった天気は全国的にまずまずであり、投票率も順調で、あとは結果を待つだけとなった。その夜、東京平河町の党本部には、続々と党幹部が戻ってきた。四階サロンが開票結果を待つ党幹部の詰所になっている。大平幹事長、江崎総務会長らが午後九時、福田首相は九時半に党本部に入った。

七時半すぎから始まった開票は順調で、苦戦と言われた東北でも青森、秋田、山形が当確となり、「当確」のピンクのバラは次第に増えていく。バラが二十を越した十時過ぎ、福田首相はすっかり相好をくずした。首相の傍でシッと開票結

果を見つめる大平幹事長は顔を引き締めたままで、二人の表情は対照的であった。

十二日の早暁、全開票は終わった。地方区は四十七名、全国区は十九名、合計六十六名が当選し、ここに与野党逆転が阻止されたのである。

この朝、党本部に入った大平幹事長は、いまはテレビのライトも報道陣の人影もない四階ロビーの開票板の前に立った。つかつかと一覽表の方に歩み寄った大平は、前夜半、当確が決まり、まだバラのついていない数人の候補者の名前の上につづつ自分でバラをつけ、「こつしてたくさんのバラがつくのはいいもんだねエ……」と誰に言つともなくつぶやいた。苦しい戦局を陣頭指揮で勝ち抜いたあと、はじめて喜びの感情を表した一瞬であった。

大平は、この選挙後間もなく行われた自民党全国研修会における講演の中で、『参議院選挙の教訓』として次のように述べている。

「……選挙の結果をどのように受け止めるべきかといつことであるが、まず有権者が、政局のはげしい変化を望まず、現状に大きい不満をもっていない、いわば現状肯定的な意識をもっているものとみるべきではないでしょうか。

さらにこのことは、野党のいう野党連合政権という観念論に冷い反応を示したものと受けとることができません。いつの選挙においても、野党の中には、すぐにも反自民の野党連合勢力をつくり上げて、自由民主党政権にとつて代わることをうたい上げる党があつたが、今回もその例外ではありませんでした。野党連合勢力というのは、それを結成する場合に社共と社公民の何れを軸とするのか決めていないし、また決められそうにもない。全野党連合の形でその結成をはかるといふのはいっそうむずかしい相談でありましょう。ところが選挙になると、この古い歌は、いつの場合でも無造作に歌われてきました。有権者はその都度、そうした古い歌には一向に耳を藉さなかつたし、今回の場合もそうであつたように見受けられます。

……ただ一つ、私どもが注意しなければならぬことが静かに進行中であります。最近の世論調査によると、支持政党なしとするものが全有権者の二十%から四十%に急に上昇しております。ここにいう無党派層の急激な肥大化は、われわれ

れがよほど注意しなければならぬ傾向であると思います。

……学者によると、今度の参議院選挙においても、去年の総選挙においても、勝った政党はなかった。ただ、無党派層がジリジリ肥大化する結果をもたらした。しかし同時に有権者の意識は、大体において健全で、政党や政治家が自信過剰や驕慢に流れることを戒めながら、しかも政局の安定をいちじるしく失うようなこともないよう、心にくいまでの絶妙な平衡感覚をもって堅実な判断を下したと申すことができず。そして自由民主党に対しても「自由民主党よ驕るなかれ」、しかし「自由民主党の責任は重いですよ」という警告と激励を同時に与えているように思われるのであります……。」